

名大醫學部學友時報 2019 1

目次	
1. 米国外科学会名誉会員選出	(1)
2. 中尾昭公先生 インタビュー	(2)
3. 新年のご挨拶	
松尾 清一	(3)
門松 健治	(4)
石黒 直樹	(5)
勝野 雅央	(6)
4. 新春随想	
古川 武光	(7)
坂本 純一	(8)
5. 第 30 回日本医学会総会 2019 中部 新年のご挨拶 齋藤 英彦	(10)
6. 謹賀新年	(12)
7. 新春後記	(16)

米国外科学会名誉会員 選出



表 彰 式

米国外科学会名誉会員選出

なか お あきまさ
中尾 昭公 先生 インタビュー

平成 30 年 10 月、名古屋大学名誉教授である中尾昭公先生が米国外科学会（American College of Surgeons: ACS）の名誉会員に選出されました。米国外科学会は 1913 年に創設され、現在では 6 万人以上の会員を有する世界最大の外科学会です。名誉会員の称号は、外科領域で貢献した医師に授与されます。消化器外科学教授を退職され、現在は名古屋セントラル病院病院長としてご活躍されている中尾先生にお話を伺いました。

——ACS 名誉会員への御選出おめでとうございます。
今のお気持ちをお聞かせください。

今まで多くの国々に出かけて、講演や手術をしたり、ビデオを見せたりして多くの学会から名誉会員の章を頂いてきましたが、米国外科学会は特別な名誉会員の称号なので、もしいただければ大変名誉なことだと思っていました。大学を辞めて 7 年が経ち、もう頂くことはできないのかと半ば諦めていたところ、今年の 2 月に受章の連絡を頂くことができたので、大変嬉しく思っています。

是非これからも、この名古屋大学から世界的に認められるような臨床研究が出れば良いと思います。そのためには、留学はもちろんのこと、海外で自分の研究を発表する機会を持つことが大切だと思います。

——先生のご功績について、この度は特にどのような点が評価されての選出だとお考えですか。

膵臓外科手術の発展に貢献した業績が認められたことが大きいと思います。具体的には、mesenteric approach による isolated PD という、手術の際に癌細胞が血流を介して他の組織へ転移することを防ぐために、膵頭部に流入、流出する血管を遮断した後に癌を切除する手術方法の確立や、抗血栓性のカテーテルを用いた門脈カテーテルバイパス法の開発、悪性度の低い病変に対する PHRSO という機能温存を目的とした手術などが挙げられます。

外科手術の発展だけでなく、2010 年に日本外科学会の会頭として、学会を名古屋で開催し、海外から多くの参加者のもと、一緒にディスカッションをし、シンポジウムを組むなど海外との親善や若い医師の教育に貢献したことも評価されたのだと思います。

——今はセントラル病院の院長としてご活躍されていると思うのですが、現在のご活動について教えてください。

外科医は手術で勝負というのが大事なところなので、

手術の前には体調を整え、患者さんの情報を十分に頭に入れ、もう少しやっておけばよかったと後悔することの無いように自分を磨き、99.9% でなく 100% の手術をするという精神の元に、病院長となった今でも手術は続いています。膵臓癌の手術というのは難しく、外科医であれば誰でもできるというものではありません。消化器の中でも食道癌、膵臓癌、肝門部胆管癌などは、多くの症例を扱い実績のあるところで行うということがガイドラインにも謳われているため、多くの患者さんが私の手術を受けに来られます。また、私の開発した膵頭部癌の術式が標準手術術式と認識されつつあるので、全国から多くの若手医師が手術見学にやってきました。

——院長として、外科医として、また教育者として、今後の展望をお聞かせください

若手外科医の教育というのが今後一番重要なことですので、名古屋大学に限らず北海道から九州まで日本中の若い医師に、この手術手技を継承させていこうと思っています。また、新技術を開発し、新たな術式を打ち立てる事も非常に重要で、良い論文を書いて世界中の学会へ行き広めていきたいと思っています。日本の肝臓、胆道、膵臓の外科は世界で最も進歩していることは間違いないので、他の国に追い越されないように、継承し発展させていくことができればと思います。

——最後に、学生へのメッセージをお願いいたします。

今勉強したことが卒業してからの勉強に繋がり、卒業してからの勉強がまたその先に繋がっていきます。何事も継続して行うことが大切なので、一生勉強を続けてください。考えずに人と同じような事をやっていては、これからの時代 AI に負けてしまいます。新しいことを考えるというのは AI にはできないことだと思うので、できないことがあるのなら何故できないか、こうやったらできるようになるのではないかと工夫し、新しいものを生み出していくことが大切です。ただ、新しい技術というのはどんなに良い物であっても臨床ではなかなか受け入れられず、広まるには長い時間がかかります。それでも、サイエンスにおいては真実が一番大事なので、皆さんにはいいと思った事は積極的に進めて、歴史に残るような業績を上げて欲しいです。

(インタビュー：小西なつ、栗田祥太郎)

新年のご挨拶



新年のご挨拶

名古屋大学総長 まつ お 松尾 せい い ち 清一



学友会の皆様、新年あけましておめでとうございます。平素から名古屋大学の様々な取り組みに対しまして、多大なご支援とご協力そして貴重な助言などをいただき、心から感謝いたします。昨年は、名古屋大学にとって大きな転換点となる年でありました。昨年 3 月に、わが国における新しいトップ大学ブランドとなる指定国立大学法人に指定されました。これは、過去の実績や今後のビジョンに基づいて、世界に伍して競争できる高いポテンシャルを有している大学を文部科学大臣が指定をするもので、これまで、東大、京大、東北大、名大、東工大、阪大の 6 大学が指定を受けています。名古屋大学は指定国立大学法人構想のビジョンの中で、4 つの柱となる目標、それを実現するための 3 つの取り組みを掲げました。4 つの柱とは、①世界屈指の研究成果を挙げること、②世界標準の教育を創り上げること、③世界に開かれた大学として国際化を推進すること、④社会や産業界との連携により大学の成果を社会イノベーションにつなげること、です。また 3 つの取り組みとは、①ガバナンスや人事給与制度改革、②財務経営改革、③マルチキャンパスによる東海国立大学機構（仮称）の設置、です。いずれもチャレンジングな取り組みですが、未来に向かって名古屋大学が飛躍的に機能を強化し、日本および人類社会の持続的な発展により大きな貢献ができるよう、大学構成員並びに関係者が、国や社会の支援を得ながら力を合わせて努力してゆくことが必要であると考えています。

世界は今、デジタル革命あるいは第 4 次産業革命の時代に入っています。これはかつてない規模とスピードで進展し、社会は短期間のうちに大きく変化すると予測されています。もちろん、医学、医療の世界も例外ではありません。またわが国では少子高齢化が一層加速し、社会保障費も増えていきます。医療そのものの在り方が激変することが予測されます。中京地区の中核としての名

古屋大学、そしてまた指定国立大学として世界を相手に戦う名古屋大学としては、少し大きな視野でこのような課題をどのように解決できるか考え、実行する責務があると思っています。財源や規制など制約が多い中で、このようなミッションを達成する一つの方策として、名古屋大学は発展の基盤を東海エリアという広がりを持った地域に置きつつ、近隣の国立大学との連携・統合を実現し、東海国立大学機構として一法人複数大学化を目指すことを提起し、昨年末に、まずは同じ志を持つ岐阜大学との間で法人統合に合意したことはご存知の通りです。当面の具体的な医学系研究科に係る課題としては両大学の附属病院間の医療情報統合や、基礎科学としての糖鎖科学領域の研究拠点の形成、があります。今後、同じエリアの医学医療の教育研究拠点として、医学系研究科や附属病院同士の連携の進展を期待したいところです。

国際化も重要な課題です。医学系研究科は全学の先頭を切って海外一流大学とのジョイント・ディグリープログラムを開始し現在その数を増やしています。また YLP、リーディング大学院など、海外との交流を盛んに行っています。病院では臨床研究中核病院の認定に加え、国際病院基準である JCI 認証取得の努力が続けられています。世界はますますグローバル化しますので、医学医療面でも国際化を一層推進していただくことを期待しています。

先にも述べたように、医学、医療、健康の領域も含めた社会全体が大きく変わろうとしている中で、名古屋大学が未来社会を先取りするような医学医療の在り方を研究し開発するとともに、その実践と実社会への実装により未来社会を先導する役割を果たすことができれば幸いです。厳しい状況ではありますが十分やりがいのある仕事だと思いますので、すべての構成員の皆様が高い志をもって、新しい年にそれぞれの立場で活躍していただくことを期待しています。



新年のご挨拶

名古屋大学医学部長・医学系研究科長

かどまつ

門松

けんじ

健治



新年あけましておめでとうございます。学友会の先生方にはよき初春をお迎えのこととお慶び申し上げます。

平成の時代が閉じようとしています。日本ではノーベル賞受賞やスポーツ界の勇躍などの明るいニュースがありました。一方で、バブル崩壊から始まり、格差の拡大、甚大な自然災害など心を痛める出来事も多くありました。新たな元号を付される時代がいいものとなるように祈りたいと思います。平成の締めくくりとなる今年は名大医学部・医学系研究科にとっても大事な年であります。4 月には齋藤英彦名誉教授を会頭とする日本医学会総会 2019 中部が開催されます。第 30 回の節目であり、名古屋では 24 年ぶりとなる総会です。「医学と医療の深化と広がり～健康長寿社会の実現をめざして～」をメインテーマとして、3 名のノーベル賞受賞者、本庶佑先生、山中伸弥先生、天野浩先生の講演をはじめ、医学の最前線から医療制度、国際化まで面白い講演と展示が目白押しです。是非お楽しみください。

2021 年に我々は創基 150 周年を迎えますが、その準備も今年から本格化します。100 年経っても変わらぬ鶴舞キャンパスのアイデンティティーを保つためのキャンパス整備、名大医学部 150 年史編纂および記念集会、動物実験施設整備の 3 つに目的を絞って 150 周年基金を開始させていただきたいと思っております。学友会の先生方からのご芳志を心からお待ち申し上げます。詳しくは追って案内を差し上げます。なお、本基金は 2022 年までに期間を限った 150 周年のためだけのものです。以前よりご協力いただいている基金「医学系未来人材育成支援事業」は恒久的なものとして継続してまいります。

さて、今日の大学では、大学ランキングが声高に叫ばれ、教育グラントの競合が盛んとなり、一方で経費削減は続き、現場には少なからず閉塞感と戸惑いがあります。このような状況だからこそ我々は、大学とは何か、日本らしさとは何か、名大らしさとは何か、を考えさせられるのかもしれませんが。「名大らしさ」を他学には真似できない文化と捉えるなら、我々には「若手育成」、「研

究」、「グローバル展開」という大学にとっての 3 大要素のそれぞれに秀でた特長があるといえます。例えば、100 名を越える学部学生が研究室に出入りしている医学部は他にありません。70 を超える病院と深い人事交流のある大学も他になく、リテラシーを共有して臨床研究を展開できるなら世界に比肩する大きな研究ができます。JDP や GAME といった大学院教育の世界展開ができてのも我々だけです。このような動きを今後弛まなく持続拡大できれば、ノーベル医学生理学賞も世界トップレベルの研究も近い将来必ず達成できると思っています。

我が国の研究力の低下が懸念されて久しく、医学分野もその例外ではありません。これにはいくつもの要因があります。例えば、世界が多分野協同、国際協同に動いている状況の中で、日本の動きが鈍いと思われます。また、新規研究分野への挑戦あるいはその下地となる組織の柔軟性にも課題が見えています。世界の科学分野数は年々増加しており、米国、英国、ドイツの参画は呼応して増え、それぞれ約 90%、60%、55%の参画率です。急速な伸びを示す中国の参画率は現在約 40%ですが、我が国はこの 10 数年横ばいであり約 30%で推移しています。このような状況は文化や価値観の違いとして看過すべきものではなく、我々には改革が必要なのだと思います。一方、抗生物質の時代からゲノム・分子標的の時代へと、医学はダイナミックな歴史の変遷を経験してきました。そしてこれからビッグデータ・情報学の時代へ移行しようとしています。このような背景を受けて、我々は今年、保健学科の情報学を組み込んだ改組、ポイント制導入を含む柔軟な人事、臨床研究支援、グローバル展開の加速など様々な取り組みを進めます。さらに、指定国立大学で謳われた東海国立大学機構のための岐阜大学医系部局との連携協議もいよいよ本格化します。

学友会の先生方には、今年も変わらぬ厚いご支援とご助言を賜りますようお願い申し上げます。



新年のご挨拶

名古屋大学医学部附属病院長 **いしぐろ なおき**
石黒 直樹



新年 明けましておめでとうございます。学友会の皆様におかれましても良いお年を迎えての門出であることを祈念しております。新たな年を迎えるにあたり、昨年中の名古屋大学附属病院に対するご支援にお礼を申しあげると共に、今年も変わらぬご鞭撻をお願い申し上げます。

ほぼ毎年の話になり、恐縮ですが今年も病院の経営にとって厳しい年になると予想されます。10 月の消費税増税に向けて議論が進んでいます。増税による景気落ち込みに対する対応策が中心で、医療費における消費税の取り扱いまでには議論が及んでいません。恐らくは、現状の診療報酬への対応ということで決着するものと思います。消費税増税後は再び各所で「補填に過不足を生じた」という今までの議論が続くものと思われます。特に多くの物品を購入する急性期病院では消費税の影響が大きいので懸念される状況です。一方で、そもそも大学病院を含めた多くの公立病院の経営が非常に厳しい状況にある事が問題であると思います。医療の高度化に合わせて病院全体の機能を高めるには設備の更新が必要になりますが、現状は更新計画を抑制することにより、赤字転落を免れています。それがいつまで続けられるか疑問です。新たな年を迎えて少しでも状況が好転することを願うばかりです。

名大病院にとって良い話題もあります。昨年来の話題となっていた、がんゲノム医療中核病院に選定されることが出来ました。この選定結果を受けて、昨年、病院内にゲノム医療センターを設けました。これはゲノム医療をガン診療のみでなく、多くの疾患に“精密医療 (Precision Medicine)”を展開するための院内組織です。全ての疾患をより正確に診断し、少ない副作用で効率よく治療することが出来る地域ナンバーワンのリーディングホスピタルであり続けるために、この組織は必要と考えています。この新しい取り組みに相応しい教員を揃えることが出来そうですから、来年 4 月には病院の新組織としてご紹介できるものと思います。

一方で名大病院は IoT 化を加速する Smart hospital

構想を推し進めています。既に夜間の搬送用ロボットを豊田自動織機と共同で開発し、運用していますが、それとは別に患者、従業員の利便性を向上させる取り組みを進めます。見守り、個人の認証識別という基本的な病院での活動の利便性向上を IoT 技術で図りたいと考えています。ヒトが IoT 技術によって守られる病院を目指して更に実地研究を進めたいと思います。

最後に本年度の目標を紹介いたします。今年の病院目標として病院改革プランをまとめました。この中に 1. 働き方改革、2. 財政改革を掲げています。働き方改革は既に新聞紙上を賑わしている長時間労働問題に対応するための業務改革です。医療関係では特に医師の長時間労働が問題となっています。従来、医療者全体でも長時間労働に対する取り組みが曖昧なところがありましたが、今後はそれを改善する必要があります。会議の短縮・病状説明の時間内実施などを実施しておりますが、今後は外来診療業務の時間短縮など学友会の先生方にも影響がある項目も含まれます。また、財政健全化も必要です。先に述べた消費税などに備えるために、病床機能に合わせた配置変更等を行い、現在行われている医療に適正化した病床配置に変更します。当院では年々、医療高度化による重症患者の割合が増加し、かなりの数の術後重症患者などが一般病床に収容されるという現状があります。これでは医療安全上にも大きな問題となり得ます。高度機能を持つ病床を稼働し、病床を再編して、安全性と医療効率性を高める計画です。

最後になりますが、学友会の皆様の従前にもましてのご支援、ご鞭撻を改めてお願いする次第です。以上簡単ですが新年の挨拶とさせていただきます。



新年のご挨拶

時報部長 **勝野** かつの **雅央** まさひさ



新年、あけましておめでとうございます。学友会の先生方には幸多き新年をお迎えのことと、お慶び申し上げます。また、旧年中は、学友会時報に多大なるご尽力をいただき、あらためて深く御礼申し上げます。

学友会時報は、名古屋大学医学部の学生と卒業生を結ぶ要として、また大学で研究・診療を行っている先生方と関連病院やその他の分野で活躍しておられる方々との情報交換の場として、昨年も様々な記事を掲載してまいりました。

大学からの情報発信としては、名古屋大学医学部、大学院医学系研究科、医学部附属病院における様々な取り組みを紹介させていただきました。研究面では先生方がプレスリリースの内容を詳細に、かつ分かりやすく解説していただき、名古屋大学大学院医学系研究科における最新の研究動向を学友会の皆様にお届け出てきているのではないかと思います。その内容から推察していただけるかと思いますが、近年基礎研究・臨床研究ともに、国際的学術雑誌から要求されるレベルが高まっており、研究の内容や実験・解析などの量と技術、研究に関わる専門家の数と種類、いずれをとっても年々高度になってきています。研究のグローバル化が進む中で、多国間の大規模共同研究が盛んになっていることがその背景の一つですが、その流れの中で中国などが躍進を見せる一方、我が国の基礎研究・臨床研究における国際的位置づけは相対的に低下してきていることが指摘されています。名古屋大学大学院医学系研究科では、門松研究科長が中心となって研究の国際化を推進されています。学友会時報の記事にも何度か登場した GAME (Global Alliance of Medical Excellence) や JDP (Joint Degree Program) は、国際共同研究を促進する枠組みであり、それを通じて研究の成果が生まれることが医学・生命科学分野における名古屋大学のプレゼンスを高めることが期待されます。

診療面においても、国際化が重要なキーワードとなっています。アジア諸国など海外からの医師・看護師の受け入れや、Joint Commission International (JCI) の認証取得を目指した病院全体の取り組みは、医療の国際化における名古屋大学医学部附属病院の方向性を示しています。そして教育面でも、世界医学教育連盟 (WFME) の国際基準をふまえた医学教育の改革が進んでいます。来年度からは学部教育において講義 (座学) を減らし、

臨床実習の期間と内容を充実させる方向で準備が進んでいます。学友会時報でも海外で臨床実習を行ったり、基礎研究を海外で行った学生たちの報告が数多く掲載されており、学生においても国際化の意識が高まっていることがお分かりいただけると思います。学友会時報でもご紹介を続けている、本年 4 月に開催される第 30 回日本医学会総会 2019 中部におけるテーマの柱のひとつも国際化であり、他の分野同様、医学・生命科学も「ものごとを地球儀で考える」時代になったといえます。

一方、学友会時報には学外の方々からも様々な寄稿をいただいております。病院長に就任された先生方や、臨床教授の先生方からは、関連病院の活動や今後の展望、そして学生や若手医師に向けたメッセージなど、熱のこもった記事を頂戴していますし、書評やエッセイ、学友会支部の報告などでは、学友会の皆様の様々な分野での活動を紹介させていただいております。こうした情報交換は学友会時報以外では成しえないものであり、時報の果たす役割の大きさとその編集の責任の重さを実感しております。

厳しい環境と激しい競争の中で名古屋大学における研究・診療・教育がますますレベルアップしていくためには、学内外の方々がそれぞれの分野で輝き、そして連携することが必要だと思います。そしてその流れが学生や若手医師のみなさんに浸透していくことも重要です。そのために学友会時報ができることが、もっともっとあるようにも感じております。皆様のご意見を頂戴しながら、学友会時報をより良いものにできるよう、時報部一同、本年も精進してまいりたいと思います。本年もどうぞご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願い申し上げます。

